

篠原幸雄からやましたゆきおへ

マンガと生きた50年

19

銀英社で仕事を拡大



ネット配信版・新つれづれ草に掲載の「マンガと生きた50年」は、東京都江東区・森下文化センターにて2017年10月20日（金）から29日（日）の会期で開催しました。新つれづれ草マンガ展「篠原幸雄からやましたゆきおへ マンガと生きた50年」で展示した展示物を再構成したものです。

おやしマンガ同人誌

つれづれ草

マンガ展

篠原幸雄からやましたゆきおへ

マンガと生きた50年

おやしマンガ同人誌「新つれづれ草」の山下幸雄は1970年少年ジャンプから篠原幸雄としてマンガ家デビューその後、マンガ家、デザイナー、編集者としての立場を変えながらマンガとの関わりを持ち続けて生きてきた。そして今再び、やましたゆきおとしてマンガを描き始めた！

入場：無料



イラスト：篠原幸雄
(著者少年ジャンプと共同連載「男のつれづれ草」の作者の父)

日時：10月20日（金）～10月29日（日）
午前9時より午後9時まで（最終日は午後5時まで）

会場：森下文化センター1F展示ロビー
お問合せ：森下文化センター
〒135-0004 東京都江東区森下3-12-17
TEL03-5600-8666 FAX03-5600-8677
都営地下鉄新宿線・大江戸線「森下」駅A6出口より徒歩8分
都営大江戸線・東京メトロ半蔵門線「清澄白河」駅A2出口より徒歩8分
<http://www.kcf.or.jp/>

主催・新つれづれ草 共催・森下文化センター





19、銀英社で仕事を拡大

銀英社にデザイナーとして参加し、徳間書店デレブランドの表紙とカラーページのデザインを毎月しながら、会社のデザイナーとして「月刊誌ふぁんろーど」や「アニメック」のカラーページ「ガンダム記録全集」やアニメムックのレイアウトデザインなどデザイナーとしての仕事は順調に拡大していきました。私のデザインチームのアシスタントとしてアルバイトも入り、デザイナーとして目一杯の仕事をしていました。

マンガ家としては、集英社のなぜなぜ理科学習まんが「鳥のなかま」を引き受け描いていました。

この銀英社内の私のチームに「Kooiくん」が加わってくれ、仕事の幅を広げることが出来るきっかけになっていきました。

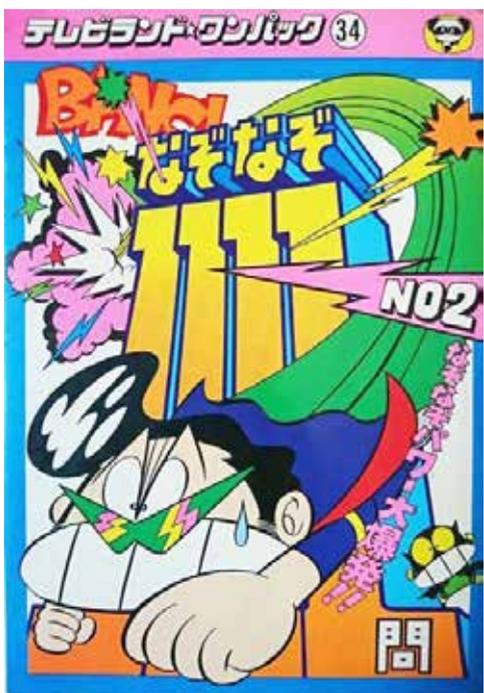


徳間書店から始めるの単行本

テレビランド編集部鈴木さんから、「テレビランドわんぱく」という単行本のシリーズがあり、「仮面ライダー怪人図鑑」が毎年出るだけで休刊状態になっている、「なぞなぞ1111問」という企画があるがやってみないか、と話をいただきました。

企画、編集、デザイン、校了まで本を一冊引き受ける初めての仕事でした。

Ko-iくんは、当時若手のマンガ家やライターの方々に、なぞなぞの問題とそれに合わせたマンガカットを発注し、1111問のオリジナルのなぞなぞを作ってくれました。私はそれ使ってレイアウトデザインして一冊の本を作り上げました。この時の二人で協力して本を作るスタイルで、それから仕事の仕方になっていきました。



企画編集からデザインまで

「なぞなぞシリーズ問」は目標の売上をクリアし、わんぱくシリーズで次の企画を何か出来ないかと依頼を受けました。

任天堂のゲームウォッチシリーズに「ドンキーコング」や「マリオブラザーズ」などが発売され子どもたちの間で大人気になり、おもちゃメーカー

やゲームメーカーから類似の小型ゲーム機が発売されていた。子どもが手で持てる大きさに白黒の液晶画面がついていて、中で小さなキャラクターがピコピコ動く程度のものであった。

これを集めて一冊の本として紹介するカタログ本「電子ゲーム大図鑑」の企画を出した。編集部では「こんな白黒の小さな液晶画面をならべて本になるのか」という意見もあった様ですが、私は



「電子ゲーム大図鑑」(徳間書店発行)



「テレビゲーム大図鑑」(徳間書店発行)

液晶画面は使わず、必勝法1、必勝法2とゲームの内容を順を追って、一コママンガに短い説明文で解説する手法を子どもにも分かる様に表現して本作りをしました。まだゲームの攻略本も無いころでした。

これで、単行本の「テレビランドわんぱくシリーズ」が完全復活し、「電子ゲーム大図鑑2」「テレビゲーム大図鑑」「ファミリィコンピュータ大図鑑」と続いて行きました。

また、秋田書店第二編集部から、女の子向けの入門書シリーズを創りたいので力を貸してくれないかと話を頂き、銀英社では経験したことが無い、新しいジャンルの企画で、これもKooiくんが大活躍してくれました。

銀英社の枠を超えたい

私は銀英社にはデザイナーとして参加していたのですが、私のチームの仕事が出版全体の関わる様になってきたため、私の気持ち会社が会社から与えられるデザインの仕事からはなれて行きました。

銀英社からのデザイン仕事は、若い女性デザイナーにまかせて、私のチームは銀英社から出る決心をしました。

当時は銀英社の皆様には迷惑をかけたと思いますが、私はそのまま銀英社の中で私の仕事を拡大していくと、中のチームワークが崩れて、かえって迷惑をかけることになるかと考えていました。